

清六は三十二、常次郎は三十。

ふたりはかど松のとれた勝田屋旅館の前に一枚の看板をうちつけた。荒けずりな四分板には、筆太く堤商会函館事務所と読められた。

『二四三号の網場はどけなっ
たかな』

『あの狼のような英国人のデ
ンビイにやったらう。どうせ、
ハバロウスクの役人のやり口は
分つとる』

吐きすてるように清六が言う
と、とり巻いたみんなの眉がび
くりとした。

『だが、群司大尉の発見した
オゼルナヤがある』

『あそこは天候が悪いし、寒
さもひどいそうなが——』
と、誰かが呟く声をさえぎるよ
うに、常次郎が叫んだ。

『なあに当ってくだけろさ。
やってみるべし、やってみるべ
し』

(4)

オゼルナヤ川は流域一二〇キロ
水源はオーゼル湖という。

清六はビリチフを案内に、回
志の高橋ひとりを誘った。

霧が川面にゆれていた。

四日目の朝だった。川底を見
つめていた清六は、あつと濁さ
の声をあげた。

ひと眼でわかる鮭の白骨。お
びたらしい魚骨の山。

アフリカ探険隊が象の墓場を
発見したよりも、ふしぎな発見
だった。

やがてオーゼル湖に到着した
一行は、そこに群れ泳ぐ紅鮭の
子を見つけた。

清六たちが、その吉報を持っ
て引きかえしたとき、常次郎は
宝寿丸に積みこみをして、切り
あけの仕度をしていた。

『さき、貴様という奴は』
『もう鮭も鱒もいらねえ』
『待て、いまオーゼル湖を見
てきたのだ』

『信じられん』

『たくさんの鮭が熊に喰いち
らされて、白骨を、さらしてい
た。湖には紅鮭の子が数えられ
ないほど泳いでいた。この川を
さかのぼる鮭のいることが考え
られないか』

『うそだ』
『バカッ』

清六のひら手うちが常次郎の
頬にとんだ。だまって見おろす
清六の目から涙が伝っているの
を見て、常次郎はうめくように
叫んだ。

『婦国はとりやめ。みんな鮭
を待つことにするべ』
その唇さがり、数知れぬ鮭の
大群が、沖の空を暗くした。

『群米（くき）だぞオ』
『さかなだぞオ』
やがて、起し船はたくましい
海の男たちを乗せて、二三二号
の建場に向かった。

『おらの負けだったじゃ、清
六、さ、おらの頬を思いきりぶ

つたいてくれ』

『バカこけ。魚がくりやせれ
でいいのよ。海はいつもこうい
うものだなあ』

オゼルナヤ川口に鮭の大群が
ひしめくのを、清六はなぎさの
水に足をつけたまま、いつまで
もいつまでも見つめていた。常
次郎はその足もとにがくと坐
った。そしてもうこらえきれな
い風に、声をあげて泣きだした
太陽はようやく夏らしい暑さ
を加えて、たたかう海の男たち
にふりそそいだ。

(5)

曙光印留語は世界に流れ、強
敵アルフレッド・デンビイの工
場はカムチャツカから姿を消し
た。大正十年（一九二一年）三月
十五日、日魯漁業株式会社が発
足した。取締役会長長堤清六、常
務取締役平塚常次郎。その名は
とおく海外にひびき、北洋の荒
波とともにいまも生きている。

清六と常次郎

鮭にまつわる話(4)

和田 義雄

『そうだ、無限だ』
『さあ日本に帰ろう。一日も早く。鮭がくさるぞ』

(2)

東京水産講習所をたずねた清六は、そこに偶然居あわせた群司大尉の紹介で、製造科の主任教官、伊谷以知二郎に会うことができた。

『日本の漁業を世界におし出すには信詰じや、信詰よりほかに道はない』

『政府はもちろんこの仕事に補助を出す。伊谷君にも全面的に力をかしてもらおう。』

どうじゃね、平塚君とふたりでやってみる気にならんかね』
清六の胸に熱いかたまりが突き上がってきた。

わっと泣き出したいほびだった。

明治四十年(一九〇七年)八月十五日。

フルチエーフスカヤの山脈に、北洋の太陽が照りつけていた。

ヤートコセ エヨーヤサア
このあみ起せば

千両万両の金じやもの

アラヤ ドッコイ

ヨイトコ ヨイトコナア

腹の底から突き出るような

「木やり」をかけて、起し船のこべりを踏んまえ、両手の指を網の目にかけて、調子を合せてたぐり起す男たち。

『がんばれよ』

清六が叫んだそばで、常次郎も目を血走らせていた。

旅順の海戦で二〇三高地の横ッ腹に大砲の弾丸をぶちまくった平塚軍曹にもどっていた。

ひとあみ、またひとあみ。捕

れば捕るほど鮭の群勢は増してきた。

三日目の夕方。さすがに清六も常次郎も疲れた。五万びきの大漁の山にかこまれ、二人はへたへたと腰をおとし、声もなく顔を見合せた。

『どえらい鮭だったのう』

『だがあの海には、まだまだたくさん鮭がおるぞ』

『無限だなあ』

(3)

明治四十四年春。